幼児の音楽指導に関する研究　そのⅠ
— ことばあそびとリズム —

A Study of Music Guidance for Infants. NO. Ⅰ
— Play with Words and Rhythm —

北　村　恵　子　　平　澤　節　子
Kitamura Keiko　Hirasawa Setsuko

要　旨

時代の潮流が目まぐるしく変化している昨今、幼児期の教育をどの様な形で位置づけるかの方向性を見極めることは大変重要な課題であるといえよう。音楽教育の面からも同様にみることができ、子どもたちが現在をそして未来をよりよく生きるために必要な音楽環境作りが大きな問題となっている。

その様な状況を踏まえて、本稿では幼児期のよりよい音楽環境作りの一環として行われた保育園での「ことばあそびとリズム」の実践を分析考察した結果、それは日本語のことばのもつ音楽性に注目した実践であり、ことばの獲得・音楽的素地育成への導入の両面から、子どもの発達段階に即した優れた指導方法であることが分かった。

キーワード：幼児教育・ことば・リズム・うた

Ⅰ．はじめに

昔からいわれてきた「三つ子の魂百まで」ということばに代表される様に、幼児期はその人の一生を決定する大切な時期であるといわれ続けてきた。その形成過程についての究明は、幼児が生きる生活全体の中で考えられるべき問題でもある。それは、幼児が実際生活する家庭の中や幼稚園や保育所においても、また、近隣地域のみならず我が国や世界を取り巻く生活環境とも大きく関わっている。時代の潮流が目まぐるしく変化し、それが幼児の世界にも激しく押し寄せてくる昨今、幼児期の教育をどの様な形で位置づけるかについては、未来の教育全体や、ひいては人間そのもののあり方を問うものでもあり、その方向性を見極めることが大変重要になってくる。

音楽教育という面に絞ってもそれは同様にみることができる。マスコミを中心とした様々なメディア文化が、選択力のない幼い子どもたちに無差別に襲い掛かってくるかにみえ、乳幼児

期の子どもたちが、現在をそして将来もよりよく生きるために必要な環境作りについて、今日大人たちが真剣に考えなければならない問題となってきている。

さて、その様な状況を踏まえて、本稿ではよりよい音楽環境作りの一環として保育園で実践した音楽指導の実際を分析することにより、その具体的な方向性について探ってみたい。

実践したもののうち、今回は特に「ことばあそびとリズム」の活動に焦点を当て、ことば・リズム・うたの関連について考察を試みるものである。

Ⅱ．ことば・リズム・うたについて

我々は感情や思考の表現としてのことばをもっている。ことばの獲得は心身の発達と同様、それぞれ発達段階を経て形成されるものである。ことばの発達は子どもの健全な育成にとってもまた大切なものであり、子どもと外界を繋ぐ重要な存在となっている。子どもは成長するにしたがって語彙量を増やしていくが、それは、子どもの生活空間の拡大と経験する対象や現象の増大と結びついている。

ことばはまたリズムと抑揚をもっている。ことばのリズムとイントネーションを声に出していってみる時、それは紙の上でみたことばや機械音として聞いたことばとは異なり、新たな感覚で捉えることができ、心と精神を動かしてその音の響きを感じ取り、個性的な様々な感情やイメージを呼び起こすことができる。その組み合わせは正に「うた」といってもよく、音楽そのものであるともいえる。

ことばと音楽との関係について中地雅之は「ことばは人間にとってもっとも身近な音であり、音楽の基礎的・根源的な要素のひとつとして考えることができます。ことば自体がもつ音楽性を重視し、ことばが自然に音楽に発展していくことが大切です」と述べている。(注1)

また、添島康夫はことばを育む根っことして、①人と繋がる力…人と繋がりたいという気持ちや意欲が育ち、自分の欲求や感情を表現したり、相手の気持ちを受け止める関わりができる力、②見る・考える力…手掛かりをもとに、その意味しているものが見えたり考えたりできる力、③動きで表現する力…自分の行動を表現の手段として使い、人と関わることができる力、④発声・発音の力…音声を聞き分け、記憶し、再生できる力の4項目をあげ、「うたあそび」でことばの根っこが育つと述べている(注2)

高橋好子は、声はことばと結びつき「歌う」という表現活動になることを踏まえ、ことばと音楽の関係について「歌うことにより呼吸器官、発声器官の強化発達、声域の伸長、発声の明瞭化、ことばに対する興味・関心度の深まり、歌詞の理解という面からの知的発達、リズム感、歌唱能力、音に対する集中度などの音楽的能力の発達進歩が養われる」と述べている(注3)

また、詳細には触れないが、一般的によく知られている様に母国語習得と音楽教育との関連については、ドイツの作曲家カール・オルフによるオルフ・メソードとハンガリーの作曲家ゾルターン・コダーイによるコダーイ・システムが有名である。

以上をみても、ことば・リズム・うたの関係は人間が生きることと深く繋がっており、「音楽」を考える上でそれを抜きにすることは考えられない程、大切な要素として捉えられている。

ことばは最も基本的・根源的な音楽の形態であり、音楽教育の出発点としてなくてはならない存在である。

Ⅲ．保育園での音楽指導の実際

これは、私立Ｇ保育園で５年前から行われている音楽指導の実際をまとめたものである。指導は平澤が担当している。ここでの音楽指導は、ことば・音楽・動き・簡単な楽器の体験等も含め総合的な活動と位置づけて行われており、音楽教室という名前で実施している。今回は特に「ことばあそびとリズム」の活動に焦点を当てて述べてみたい。

１．Ｇ保育園の概要と音楽教室導入の経緯について

Ｇ保育園は長野県上田市にあり、在園児60名、園長と保育士８名、給食・事務員３名の小規模園である。３歳児・４歳児が共に給食を食べる等、年齢の枠を超えて活動することが多い。きょうだいの少ない園児が多い中、ここの保育園は大きな家族の様な存在であり、非常に暖かな雰囲気をもつ園である。園長の「心身共に健康で、個性を伸ばしながら社会性や創造性のある子どもを育成したい。音楽活動を通して初めて入る集団生活にスムーズに適応させたい。また、幼児期に音楽の楽しさを経験して、情緒豊かな子どもになって欲しい」という願いから、音楽講師による指導が始まった。

２．音楽教室の目標と内容

音楽教室は年間20回程度実施されており、何れも保育時間中に３歳児から５歳児までの各クラスで30分間程度行なわれている。したがって、３歳児から始めて５歳児になるまでの３年間、音楽教室を体験することになる。

指導目標は「音楽を楽しみ、様々な感性を養う」ことを基本とし、一つ一つのテーマを実施する時に「子どもの心身の健全な育ち」に資することを具体的目標に掲げて、園長・保育士と講師が共に検討して決めている。

指導内容は大きく分けて　① 歌唱、② ことばあそびとリズム、③ 即時反応、④ 模倣（模唱・模奏)、⑤ 器楽他の５つのテーマに渡るが、実際には①から⑤のそれぞれの項目を中心としながら、それらを総合的に活用した内容を設定している。

３．「ことばあそびとリズム」の活動目標と内容

「ことばあそびとリズム」の目標は　① ことばとリズムが一致していることに注目させる　② 語彙を増やす　③ ことばのもつ響きの面白さを味わう　④ ことばとリズムの組み合わせにより複雑なリズムに慣れる　⑤ ことばの応答によってテンポ感・拍子感を養う等である。

ここでいうことばあそびは、日本語（単語）のもつリズム（イントネーション）に合わせて手拍子や打楽器を叩くことを中心としている。

「ことばあそびとリズム」の活動は子どもは「まねっこさん」と呼び、４拍子のビート（テ

ンポ）内で、指導者が発した単語を園児にオウム返しにいわせることから始まる。例えば先生：「カエル」（この後“はい”といって応答を促す）…子ども：「カエル」、先生：「トノサマガエル」…子ども：「トノサマガエル」というようにことばを真似していく。一通りことばの応答が終了すると、同じ単語を使って、ことばのもつリズム（イントネーション）に合わせて手拍子（原則として一語につき一拍）をつけて繰り返し行う。応答のタイミングに慣れてくるのを見計らい徐々にスピードをあげて応答させると、子どもたちは以前より集中度を増して、手拍子のリズムも明確なものになる。手拍子に慣れると、カスタネットを用いて同様に「ことばあそび」を行う。この段階になると単語にもリズム打ちにも慣れているので、指導者の発した声の大小強弱を聞き分けて、強弱をつけて応答することができる様になる。

今まで実践してきた単語例としては「ネーコ」（ネコでは4拍子に合わないため、リズムを（♪ター・アー・タン・ウンとした。ウンは一拍休みである）、「ホッキョクグマ」（♪タン・タタ・タタ・ウン）、「ジンベイザメ」「百日草」（♪タタ・タタ・タタ・ウン）、「おにやんま」「きびだんご」「ゴマ豆腐」（♪タタ・タン・タン・ウン）、「ずんだもち」「レンゲ草」（♪タン・タタ・タン・ウン）、「タマゴ豆腐」（♪タタタ・タン・タン・ウン）、「松ぼっくり」（♪タタ・タン・タタ・ウン）、「ラッパ水仙」（♪タッカ・タン・タン・ウン）があり、それぞれ子どもたちに身近な動物・食べ物・花等であった。これらの単語は日本語として響きがユニークであり、ことばにリズムや躍動感があるものが多い。

活動を始めた頃は、指導者の発することばのみに集中して応答をする子どもたちの様子がみられたが、活動が進む内に子どもたちから自発的にテーマに関係した単語があがり始めたので、最終的には自分で単語名を考えさせる方向に働きかけていった。動物名を扱った第1時では、「ネーコ」の呼びかけに続き『ニャーオ』『ニャン・ニャン・ニャン』と動物の鳴き声を加えた子どもがいたり、「アマガエル」「ウシガエル」「クワガタ」「カブトムシ」「赤トンボ」等の名前もあがった。食べ物名を扱った第2時では、「タマゴ焼き」「パイナップル」等果物の名前、「おにぎり」「ハンバーグ」「カレーライス」「サンドイッチ」等、子どもたちの好む食べ物の名前が多くあがった。また、食べ物の名前を呼びかけると“パクッ！”と食べる動作を加えて合いの手を入れる子どももいた（先生:「きびだんご」…この間で“パクッ！”と合いの手が入る…子ども：「きびだんご」）。花の名前を扱った第3時では「りんどう」「チューリップ」「ひまわり」「コスモス」「あさがお」「バラ」等の名前があがった。応答を繰り返す内に、子どもたちはテーマに関連した単語を次々と変化させて、その場の思いつきで鳴き声や合いの手を加えたりと、「ことばあそび」を様々に変化させていった。

4.「ことばあそびとリズム」の活動の考察

Ⅲの2で述べた様に、G保育園での音楽指導（音楽教室）で行われる内容は大きく5テーマに分けられており、ここではその内「ことばあそびとリズム」を取り上げて記述してきた。しかし、その内容はあくまでも総合的な活動として行われるために、他と分けることのできないものもある。それは、この活動に対する園の目標「子どもの心身の健全な育成」を考えると当

然のことでもある。子どもの育成に関わる時は、常に部分のみに拘らずトータルに捉えることが大切だからである。

さて、「ことばあそびとリズム」の活動ではまず第一に、我々が日頃使っていることばにリズムがあり、ことばとリズムが一致することの理解と快感を味わうことができたものと考えられる。リズムに乗ってことばを語る時、それは恐らく無意識に音程がつけられメロディーのあるうたになってしまうだろう。これは簡単にいえば節のついたことばであるともいえよう。節をつけてことばを口にし、それを耳で聞き、体を動かしてあそぶといった一連の活動は、ことばをより深くより豊かにするものではないだろうか。それは、もともと自然に生まれてきた「わらべうた」と同じルーツをもっているものと考えられる。

第二に、子どもたちの語彙を増やす活動として有効なことが分かった。最初は指導者の発することばのみに集中して応答していた子どもたちが、馴れてくるのにしたがい自発的に単語をあげ始めたり、単語から連想する鳴き声をテンポよく発したり、自分の好きな食べ物や花、果物、動物、そして、子どもには難しいと思われている単語でも知っているものはどんどん出してみたりと、ゲームでもしているかの様に楽しい時間を過ごしながら、実は自発的に語彙を増やす活動となっていったことが分かる。

第三に、ことばのもつ響きの面白さを感じ取ったものと考えられる。日本語のもつ抑揚を感じ取り、リズムをつけていってみると、その響きの面白さに触発されてイメージが膨らみ、次々と新しいことばを出してみたくなるというふうに、創造性を育成するために有効な活動となっている。子どもたちの興味をそそる面白い活動として位置づけられるものであろう。

第四に、ことばとリズムの組み合わせにより、シンコペーションや付点のリズム、３連符といった複雑なリズムにいとも簡単に慣れてしまうことがあげられる。音楽教育・音楽指導と大上段に構えなくても、ことばのもつリズムを用いて楽しみながらあそぶことで音楽的なリズム力が身につくとすれば、この方法は大いに利用すべきものであろう。

最後に、ことばの応答によってテンポ感・拍子感が養われることがあげられる。子どもたちが「まねっこさん」と呼んでいるこの活動は、両者のやり取りに対して時間的制限が存在する。即ち、先生と子どもたちとの応答には必ず一定のテンポと拍子が限定され、その限定の中で集中してことばをやり取りする緊張感を味わい、それが達成された時に満足感が生まれるといった、楽しいあそびをしている時の様な充実感をもつものと考えられる。この様なテンポ感・拍子感の育成方法は、第四で述べたリズム感と同様、音楽的にも優れているといえよう。

Ⅳ．幼児期の音楽環境作りにおける留意点

今まで子どもたちにとってことば・リズム・うたの関連が如何に大切かについて、保育園での実践の分析考察も加えて述べてきたが、次に、幼児期の子どもにとってどの様な音楽環境が求められているかについて述べてみたい。

人間が成長するためにはそれぞれに発達段階が存在する。身体的な生育にもそのプロセスがある様に、心の発達も同様のプロセスを経るものである。生まれてすぐ急に成熟するというも

のではない。また、人間はその置かれた環境に順応して生きる存在であり、社会状況の変化が人間の生理にも確実に影響を与えていることは、我々の経験からもよく理解できることである。子どもは大人よりも物事を柔軟に捉えやすく、大人の価値観と異なることでも感性が合えば取り入れていく。そういった意味においては「子どもはこういうものだ」という大人の常識を疑ってみることも必要であろう。

音楽教育という観点からも同様のことが考えられる。世間一般の常識といわれることを一度疑ってみれば、従来から行われている音楽教育は子どもを鋳型にはめ込み、そのフレキシブルな可能性を奪っているかもしれないのである。今行われている音楽活動は子どもが本当に必要としているのか、それが本当に将来のための栄養になっていくのか等、子どもに関わる全ての人は常に疑問をもち真剣に考えなければならない。時には、よかれと思って教えていることが実は子どもに害を与えているということにもなり兼ねないではないか。

さて、未来からやってくる子どもと過去が紡いできた音楽文化を共有しようとする時、過去の鋳型に押し込めるのではなく、我々の想像できない子どもの新しい可能性を認め伸長させようとする姿勢が重要であることは前述したが、一般的に、地域や家庭、そして、幼稚園や保育園等の現況を鑑みると、そういった面でかなりの問題を感じざるを得ない。幼児期の音楽環境を整えると称して、特別な音楽指導、それも技術向上のみを目指すものの多いことは、筆者の周りでも確実に認めることができる。幼児期のよりよい音楽環境が幼児の心身の成長発達に真に益するためには、関係者に深い見識と慎重な対応が求められているものといえよう。

V. まとめ

今幼児を取り巻く音楽環境は、必ずしも満足とはいえない状態である。テレビマンガやテレビゲームに代表される様に、スイッチを捻れば華やかで賑やかな音楽や映像が否応無しに目や耳に飛び込んでくるという、大変な時代である。選択力の無い子どもにとっては、刺激的で魅力のある画面に引き込まれるのは当然であろう。しかし、Ⅰ.やⅡ.で述べた様に、それが子どもの発達段階を踏まえた育ちに本当に必要なものかどうか、充分に吟味されたものとは決していえない。

保育園や幼稚園における状況もそう楽観できるものとはいえない。従来と比較してハード面としての音楽関係の機器は概して立派になったと考えられるものの、ソフト面、即ち園の方針や保育士の音楽に対する考え方や見識・技術によって、その良否が分かれていく現状がある。

Ⅳ.で述べた幼児教育の現場で行われている音楽技術向上のための指導等も、子どもの緩やかで確実な発達段階を踏まえた心身の育ちを願うというよりは、直ぐ目にみえる促成栽培のごとき方法が日常的に行われ、それを保護者も喜ぶという可笑しな構図を垣間みることができる。

その点、Ⅲ.で紹介したG保育園の「ことばあそびとリズム」の実践は、日本語のことばのもつ音楽性に注目したものであり、考察の結果から、ことばの獲得の点からも音楽的素地育成への導入の点からも、子どもの発達段階に即した優れた方法であることが分かった。それは、我々の先祖が伝えてくれたわらべうたに共通点を見出すことができる。わらべうたは日本語の

もつイントネーションやリズムが最も自由な形で旋律になったものといわれており、特に日本音楽の様々な基本的要素が詰まっている。しかし、現代の子どもたちは伝統的なわらべうたばかりうたっている訳ではなく、唱歌、童謡、アニメソングやゲーム音楽、外国の音楽等、多様な音楽を楽しんでおり、身の回りにある様々な音楽を取り入れ消化して、自分たちのものにしてしまう柔軟性をもった存在であるが、母国語獲得と音楽教育との観点からはわらべうたは軽視できない。そしてまた、わらべうたはその限度ももっていることを承知しておきたい。これに関しては稿を改めて論じてみたい。

子どもを取り巻く生活環境が大きく変化している現況において、幼児教育におけるよりよい音楽環境作りとは何かについて探ることは大変難しい。しかし、今回考察してきた保育園での「ことばあそびとリズム」の活動は、少なからずも幼児の成長発達を考慮した音楽活動であることが分かった。この様な活動を継続しながら、我々は幼児期の子どもたちの心身の成長発達に真に益するための、よりよい音楽環境作りについての模索を続けなければならない。

【注】

（注1）　谷川俊太郎・中地雅之：子どものための音楽「ことば・あそび・うた」8p.　SCHOTT 社　1994

（注2）　添島康夫：「ことばをはぐくむ歌あそび」 79p.　ぶどう社　1997

（注3）　高橋好子：「音楽をたのしむ子どもたち」 90, 91p.　文化書房博文社　1992

【参考文献】

北村恵子：「音楽表現の世界」　樹芸書房　1994

西澤昭男・内山澄孝・神原陸男・北村恵子・渡辺亜紀人：「音楽教育における不易と流行」
教育芸術社　2002